

# 日英比較表現論（４）

南 満幸 ●メディアと表現

---

## ●要約

本稿は、南（1999 b）の“続編”である。前稿では、いわゆる「身体表現」における日本語と英語の“発想”の類似点・相違点を「頭」から始めて、「首」・「肩」・「腕」・「手」まで追ったが、紙幅の制限・時間的な制約などの諸事情のため、「未完」の状態で終わってしまった。

そこで、本稿では上記５項目に出来るだけ多くの項目を付け加えることによって、前稿・本稿と合わせて、一応の「完結」を見るようにしたい。

論の進め方、及び判定方法は、基本的に、前稿の方式を踏襲するものとする。即ち、

（１）日本語の身体表現（例えば、「頭」を含んだ表現）を英訳した時、それに対応する英単語（この場合 head）を用いるのが最も自然な場合は○、それも可能だがそれと同等以上に自然な他の表現がある場合は△、対応する英単語を用いた英訳が無理な場合は×、というふうに、やや大雑把ながら３種類に分類してみる。

（２）次いで、「英語→日本語」という逆方向から同様の分析を行なう。

という手順を踏んで行く。

## ●キーワード

身体表現

日英語比較

発想

## Keywords

body-part expression

comparison between Japanese and English

conception

## 1 胸

初っ端から、これはかなりの難物である。日本語の“胸”という名詞自体の多義性(※1)によるところが大きいのであろうが、「日本語の“胸”に対応する英語は？」と考えると、chest, breast, bosom, heart, mind, …といった具合に、5つや6つはすぐに思い浮かんでくる。

日本語が、かなり多くのケースを「胸」1語でカバーできるのに対して、英語では数個の名詞による“分業”を余儀なくされている、とも言える。そういった事情を考慮すると、「日本語→英語」では、上記のうちどの英単語が出現しても「○」に分類するのも止むを得ないであろう。

○ 胸が痛む《比喩的に》      one's heart aches (to see ... , etc.)

身体の一部としての「胸」に「心」という意味も持たせているのは、やはり、「心」は心臓に宿る、と古の人々が考えていたからであろう。

[illegible]

日本語ではただ「胸がいっぱい」と言えばよいのに対して、英語では、①におけるように動詞の fill を使えば、「何でいっぱいなのか＝感情の入れ物たる heart の中身」を明示しなければならないという違いがある。但し、これも、「fill を使えば」の話で、形容詞 full を使うならば、「中身」を明示する必要はない。その証拠に、次のような言い方も英語としてごく自然である。

胸がいっぱいで、何も言えません。 My heart is too full for words.

①だけを見ると、「○」を付けてもよさそうだが、和英辞典によっては、②の英訳を与えているものもあるので、ここではあえて「△」とした。

ところで、②は、表現全体としては見慣れたものではあるが、よく考えてみると、ここに登場する“lump”とは一体、何であろうか。例えば、次の2つの可能性が考えられる。

(A) *Longman Dictionary of Contemporary English* (以下、*LDCE* と略す) の1987年版にある定義 2 “a hard swelling on the body” だとしたら、「喉に瘤(腫れ物)が出来る」→「喉が締めつけられるような感じがする」ということであろうか。もし、これだとすると、強い感情(特に、「喜怒哀楽」の哀か)が湧き起こると、日本語では「胸が締めつけられる」(後出)と言うが、英語では締めつけられるのは「喉」という違いがあるのも興味深い。

(B) もう一つの可能性は、*LDCE* の定義 1 “a mass of something solid without a special size or shape” (塊)

である。もしこれだとすると、「heartに強い感情が湧き起こった」→「しかし、量が多過ぎたために溢れ出てしまった」→「その溢れ出た感情が“塊”となって喉に引っかかった」というイメージの比喩表現であろうか。火山が溶岩を噴き上げて、その溶岩が固まるのに似ているかもしれない。

#### △ 胸に手を当てて考える

① search one's own heart

② think 《a matter》 over / ponder over 《a matter》

日本語の方は、外から胸に手を当てて、その中にある心（=かつては、心臓に宿ると考えられていたのであろう）の中に何か思い当たることがないかどうか探す、という発想から生まれた表現だと考えられる。それだと、「自分の心を探る」という発想で書かれた①の英訳がぴったりと当てはまるようである。

それに引き換え、②だと、単に「じっくり考える」という意味しか読み取れず、「胸に手を当てて」という部分のインパクトが伝わらないので、「英訳として不合格」とまでは言えないにしても、①よりはだいぶ劣る、と言わざるを得ない。ただ、和英辞典を批評することが本稿の目的であるわけではないので、これ以上は追及しないことにする。

#### △ 胸に迫る

① be (deeply) moving/touching

② give 《a person》 a twist in his heart

まず、①であるが、現在分詞から派生した形容詞 moving, touching の元の動詞 move, touch の“隠された目的語”は何か、と考えると、それはたぶん、heartに間違いないとは思うが、少なくとも表面には現われていないので、①だけを見ると「×」であろう。

②はやや凝った表現。「(人の) 心をねじる／ひねる」→「物理的刺激を与えられた心からある感情を生じさせる」という流れであろうか。

#### △ 胸を打つ

① move 《a person》 deeply

② strike 《a person's》 bosom

③ tug at / touch 《a person's》 heartstrings

②は、「日本語そのまま」と言える。また、bosomが登場する数少ない表現の一つでもある。

③も、「(人の) 心の琴線に触れる」という日本語がぴったり当てはまる。心を“弦楽器”になぞらえて、その弦に触れることによって、「メロディーを奏でる」→「ある感情を生じさせる」ということであろうか。

『大辞林』で「つかえ」を調べてみると、漢字では「痞え」または「悶え」と書いて、「病氣や精神的な悩みのために、胸がつまって苦しいこと」と定義されている。もちろん、動詞「悶える（＝引かかる、詰まる）」から派生した名詞である。

イメージ的には、胸（＝心）は管のような形をしていて、その途中で何らかの原因によって管が狭くなったために「流れ」が悪くなった、ということであろうか。この点では、「喉に瘤が出来る」という発想の have / get a lump in one's throat（前出の「胸がいっぱいである」の項を参照）と相通ずるものがある。但し、lump は時に「喜び」などの好ましい感情が“実体化／具現化”したものであるのに対して、「痞え」の方は常に“有り難くない存在”である、という明確な違いがある。

英訳の方は、かなりの苦労の跡がうかがえる。「胸のつかえ」をシンプルに表わす英語が見つからなかったので、「心の重しが消える」と書くしかなかったようである。

× 胸を撫で下ろす

be / get / feel relieved

日本語の方は上の例に関係がありそうである。但し、英訳の方にはその関連性は見えていない。筆者の感覚では、「胸を撫で下ろす」と「安心／安堵する」は、意味が非常に近いのは確かだが、「100%同じ」とまでは行かないように思われるのだが、英訳すると、どちらも“be / get / feel relieved”になってしまう。

「胸を撫で下ろす」という表現に出くわすと、筆者の感覚では、「心に巢食って、緊張の種となっていた不安・心配の類が、朗報などを聞いた瞬間、消えた（あるいは、体内をくだって外に“排泄”された）ので、当人が『良かった、良かった。やっと、心が軽くなった』と我が胸を撫でている」光景が目浮かぶのだが、それを英語で表現するのは、どうやら無理なようである。

× 胸騒ぎがする

① feel uneasy

② have a foreboding / presentiment

2つの英訳の比較では、①よりも②の方が優れていると思われる。「不安に感じる」とう発想で書かれた①では、「胸騒ぎ」という日本語の持つ「不吉さ」のニュアンスが十分には伝わって来ないような気がするからである。

今度は逆に、「英語→日本語」の方を見てみよう。まずは、「日本語→英語」で最も“活躍”した heart から。尚、「判定」であるが、この場合は、和訳に“心”か“胸”のいずれかが現われていればよいものとする。



- act with one heart and mind 一心同体である

元の英語表現の方は、「(感情が宿る所としての) 心 = heart」と「(知性・理性が宿る所としての) 心 = mind」の両方が登場する、珍しいものである。

- × break 《a person's》 heart (人を) ひどく悲しませる

「心を壊す」と訳しても、言わんとするところは何とか分かってもらえるかもしれないが、少なくとも「普通の日本語」とは言えない。また、「心を砕く」では、意味が違ってしまう。「胸」でも同様に、両方とも不可である。次例も同様。

- × tear 《a person's》 heart out (人を) 悲嘆に暮れさせる

- come home to 《a person's》 heart (人の) 胸にこたえる

- × do 《a person's》 heart good (人を) 喜ばせる、元気づける

「(人の) 心に良いことをする／心のためになる」と和訳しても、かろうじて意味は分かってもらえるかもしれないが、とうてい、“自然な日本語”とは言えないであろう。

- × eat one's heart out /  
devour one's heart 悲嘆に暮れる、くよくよする

「自分の心を食い尽くす／むさぼり食う」では意味不明。

- × have one's heart in one's mouth /  
throat / boots 非常に心配している、怯えている

- × lay one's heart at 《a person's》 feet (人に) 求婚する

「(人の) 足元に自分の心を置く」とはまた面白い表現である。「これ、この通り、僕の心は君に捧げるから、どうか結婚しておくれ」という感じであろうか。

- ? one's heart leaps into one's mouth びっくり仰天する、寿命の縮む思いをする

「heart が口まで飛び出すほど」という含意がはっきり見て取れるので、「△」にしてもよさそうな気もするが、ここで言う heart は、“心、胸”というよりはむしろ“心臓”であろうから、判定不能とし

た。「心臓が（“定位置”である胸から移動して）口に入る」という発想は次例にも見られる。

× with one's heart in one's mouth おっかなびっくり

? one's heart skips / misses a beat びっくりする、興奮する

「心臓が鼓動を一回とばすほど」という含意はインパクトがあるが、2つ上の例と同じ理由で、これも判定不能とした。

○ to one's heart's content 心ゆくまで、思う存分

「心が満足するまで」という非常に分かりやすい表現。

次に bosom であるが、この単語を含む表現は、heart に比べるまでもなく、極端に少ない。さまざまな英和辞典に当たってみたが、結局、見つかったのは次の2例のみであった。

× in Abraham's bosom 死んで、天国に

「アブラハム（古代ヘブライ民族の始祖と言われる）の胸に抱かれて」ということであろうか。

× take ~ to one's bosom （女を）妻にする、（人を）大切にする

「～を胸に掻き抱く」というイメージからの発展か。

chest に至っては、bosom より更に“悲惨”で、イディオムとして項目立てさえされていない辞書もあるくらいである。かろうじて、「ランダムハウス英和大辞典」（小学館）に次のイディオムを見つけた。“擬似イディオム”かもしれないが、「判定」は一応行なうことにする。

○ get something off one's chest 心に重くのしかかっていることを人に明かす／打ち明けて  
心の重荷を下ろす

「胸につかえていた厄介物を（口から？）吐き出す」→「圧迫感が消えて、胸が楽になる」というイメージであろう。

これまた、「イディオム」とは言えないかもしれないが、「ジーニアス英和辞典」（大修館）には、語義5「胸の中、心」の例として、次の表現が載っていた。

× have something on one's chest 気になることがある

前置詞として、in ではなくて on が用いられているということは、「心配事が心の上に“重し”のように乗って、心を圧迫している」というイメージなのであろう。

## 2 腹

①「(胴体の一部としての／消化器としての) 腹」は、たいてい stomach, belly, bowels の3語 (これをA群とする) くらいでカバーできそうだが、問題は、②それ以外の“腹”である。(困ったことに、イディオムに現われる“腹”は、ほとんどが後者である。)

英訳に heart, mind が一再ならず現われることからすると、前項の「胸」に通じるところもあるが、完全に重なるわけではないようである。「心」は「心」でも、より限定された「本心／心底／心根／決心」といったところであろうか。それに加えて、「意図／胆力／気概／怒り／怒りを“処理する”器官(※2)」といった意味合いもありそうである。

従って、英訳に resolution, decision, determination, guts, intention, pluck, anger など (以上をB群とする) が現われてもよいことにする。しかし、これほど“判定基準”を緩くしたのでは、そもそも「判定」する意味がなくなるのではないか? …という不安を抱きながらも、判定は続けることにする。

△ 腹が黒い

① be evil-minded / black-hearted

② be malicious / wicked / treacherous

①の「邪悪な心 (= mind) を持った」という発想の表現だけを見ると「○」だが、② (それぞれの形容詞のニュアンスは微妙に異なる) も、「ごく普通の英語の表現」なので、判定は「△」とした。

特に興味深いのは、①の「黒い心 (= heart) を持った」という表現である。黒が“悪” (悪意、邪悪、陰悪など) を象徴する色である、という感覚は、日本語と英語に共通するようである。

また、heart は“色”のみならず“材質”も重要な要素らしい。例えば、英語には次のような表現がある。

A	B	C
(a) a heart of gold	金でできた心→優しい心	
(b) a heart of oak	櫟でできた心→勇猛な心	
(c) a heart of stone	石でできた心→冷酷な心	

B欄からC欄への連想であるが、(c) は、日本人にとってもだいたい予想の範囲内だとしても、(a),

(b) については、日本語の感覚としては、すぐには結び付けられないかもしれない。

(a)は、ちょっと推理力を働かせれば、おそらく「さまざまな“心”がある中で、“優しい心”こそが最も価値の高いものである」という考えから、「金 (= 貴金属の王)」にたとえられているのだろうと予想がつくかもしれないが、(b)の方はもっと難物である。oak が“木の王様”とされているという英語圏の文化的背景、及び、oak の花言葉が「勇気／愛国心／独立」であるということを知らなければ、理解が難しいであろう。

○ 腹のすわった男

- ① a resolute man
- ② a man with plenty of guts

△ ～に腹が立つ

- ① ～ drives one crazy
- ② get angry at / with ～
- ③ take offense at ～
- ④ lose one's temper with / for ～

○ 腹の探り合いをする

try to fathom the unexpressed intentions of each other

△ 腹が太い

- ① be broad-minded
- ② be big-hearted
- ③ be generous
- ④ be magnanimous

①・②は、mind と heart の使い分けはあるものの、日本語の「心が広い／大きい」と全く同じ発想で書かれた表現。この2つだけを見るなら、文句なく「○」だが、③・④も英語としてきわめて自然な表現である以上、全体としては、「△」と判定せざるを得ない。

× 腹に一物ある

- ① have an ax to grind
- ② have some evil end in view
- ③ have an ulterior motive

②「何らかの邪悪な目的を視野に入れている」及び、③「隠された動機 (→ 下心) を持っている」は、日本人にも分かりやすいが、①はどうであろう。「研ぐべき斧を持っている」→「(相手に斬りかかる機会をうかがいながら) 懷に切れ味を良くした斧を隠し持っている」というイメージであろうか。

△ 腹に据えかねる

- ① can't stand / stomach / pocket 《an insult etc.》
- ② cannot suppress one's anger

- ③ be out of patience 《with a person》
- ④ cannot put up 《with a person's impertinence etc.》

いろいろな英訳が可能なようだが、①に“動詞の”stomach が現われているのが興味深い、ということ以外、特筆すべき点はない。

- 腹を決める
  - ① decide
  - ② make up one's mind
  - ③ be settled in one's resolution
- 腹を据えて～に取りかかる
  - go about ～ with determination
- (人の) 腹を読む
  - ① read 《a person's》 mind
  - ② fathom 《a person's》 intentions / thoughts
  - ③ enter into 《a person's》 mind

①・②は、それぞれ、「心を読む」・「意図／考えを推し量る」という発想で書かれた分かりやすい表現。

「(人の) 心に入り込む」という発想で書かれた③は、面白い表現である。“探索者”が、例えば、ホワイトハウスの the Oval Office (大統領執務室) など“心臓部”への侵入に成功すれば、機密書類も見つけ放題…というわけか。

- △ 腹を割って話す
  - ① talk straight
  - ② speak frankly
  - ③ talk heart to heart
  - ④ have it out
  - ⑤ talk (cold) turkey

①～③はともかく、④・⑤は若干の考察が必要であろう。④はまだ、例えば、“it”とは「心の中身(=本音)」のことで、「それを表に出す」→「本音で話す」ということか…という具合に、“推理”が可能だが、⑤(主に商談などの時に使われる)の由来は不明。全く予想がつかない。まさか、七面鳥が“率直な鳥”(?) だから…というわけではあるまいし。(※3)

次に「英語→日本語」だが、この項の冒頭の、日本語の“腹”の分類を振り返ると、少なくとも、A群に関しては、あまり“好成績”は期待できそうもない。

まずは、stomach であるが、これを含むイディオム自体がまず少ない。しかし、その中でも、一つだけ本稿で取り上げる価値がありそうなものを見つけた。

△ have no stomach to (do) / for ~      ~する気がしない／～を好まない

ここでの stomach は、少なくとも、「(消化器官としての) 腹／胃」でないことは明らかである。おそらく、「意思／意向／嗜好」あたりであろう。きわどいところではあるが、判定は「△」とした。

bowels も、案の定、比喩的な意味でイディオムの一部になっている例はほとんどなかった。唯一、

△ have no bowels      薄情である

を見つけた（この bowels は「慈悲／情」という意味であろう）が、但し、これは《古語》(archaic) である。

belly に至っては、予想の範囲内とはいえ、イディオム自体が一つもなかった。

heart, mind からの英訳については、前項「胸」で考察したので、省略する。

最後に B 群であるが、これが問題である。日本語「腹」と比べて B 群の単語はあまりにも“細分化”されているせい（意味が細分化されている単語は、イディオム自体が少ない、という傾向がある）もあって、本稿で取り上げるに値するイディオムはほとんどなかった。

例えば、“make a decision”という表現を無理に取り上げて、これを「腹を決める」と和訳することもあるかもしれないが、それは「日本語→英語」で既に述べていることであるし、そもそも“make a decision”は「イディオム」と呼べるような代物ではない。

○ hate 《a person's》 guts      (人を) 腹の底から嫌う

人の外見・仕草・話し方など“表面的な部分”ではなくて、「心の奥底」という“中核的な部分”を嫌う、というかなりインパクトの強い表現。

○ work / sweat one's guts out      一心不乱に働く／精魂を傾ける

「働く／汗をかくことによって自分の精神的エネルギーを消耗させる」というイメージであろう。

### 3 腰

ここでも、日本語と英語では“分割の仕方”が違う。日本語の“腰”を1語で表わせる英語の名詞は存在しない。従って、waist, (lower) back, hip(s) などを使い分けるしかない。

- × 腰が軽い
- ① be quick to act
  - ② be ready / willing to work

①は「行動（に移るの）が速い」、②は「喜んで仕事をする」という発想で書かれているが、いずれにしても、英訳に“腰”に相当する単語は現われない。

- × 腰が重い
- ① be slow to act
  - ② be slow in starting work

上例に同じ。

- × 腰が低い
- ① be modest
  - ② be courteous
  - ③ be unassuming

①は「謙虚である」、②は「礼儀正しい」、③は「偉ぶらない」に近い。筆者の感覚では、日本語の「腰が低い」は、この3つの意味を兼ね備えているように思えるのだが、やはり英語1語で表わすのは無理であろう。

- × 腰を折る
- ① cut in 《while another is talking》
  - ② interrupt 《another》
  - ③ take the wind out of 《another's》 sails

①は「(人が話しているところに) 割って入る」、②は「話を中断させる」という発想。③が面白い。「相手の帆から風を奪う」→「せっかく快調なペースで帆走している相手の船を遅くする／止める」という比喻であろう。

- × 腰を据える
- settle down 《to work etc.》

- × 腰を抜かす／腰が抜ける
- ① be paralyzed 《with shock etc.》
  - ② be petrified 《with terror etc.》

①は「(ショックなどで) 体が麻痺する」、②は「(恐怖などで) 体が石のようになる→硬直する」というイメージの表現。いずれにしても、“腰”に相当する名詞は出て来ない。



× 腰を浮かす half rise to one's feet

「半分立ち上がる→立ち上がりかける」という発想。これほど“イディオム色の弱い”(=物理的表現に近い)表現にさえ、「腰」に相当する単語が現われないとは、ある意味で“感動的”ですらある。

次に、「英語→日本語」であるが、waist, (lower) back, hip(s)の3語合わせても、イディオム自体次の2つしか見つからなかった。

× have / get / catch / take ① (人を) 完全に押さえ込む  
《a person》on / upon the hip ② (人を) 支配する / (人の) 優位に立つ

但し、①は《レスリング用語》、②は《literary》(文語)、後者は《archaic》(古語)という異種レーベルが付けられていた。つまり、少なくとも、“日常的に普通に使われる表現”ではないということになる。

× smite 《a person》hip and thigh (人を) こっぴどくやっつける

「尻と腿を強打する」とは、「この人には敵わない／逆らえない」と恐怖心を植え付けるための“暴行”であろうか。

## 4 足

これは、英語では foot と leg という2つの部分に分けられる。(leg は、時に foot を含むこともある。) 後者に対しては、“脚”という別の漢字をあてて区別することもできるかもしれないが、本稿では、あえて foot も leg も同じく“足”として扱うことにする。

× ～から足がつく ① be traced 《through ～》  
② ～ puts the police on the scent

①は、「盗品などから出ている“糸”を辿って行けば、犯人に行き着く」というイメージであろうし、②は、警察を“犬(それも恐らく猟犬)”にたとえて、「～」部分に入る主語(盗品など)がその犬に「(犯人の)臭いを追跡させる」という発想で書かれた表現であろう。

× 足が出る ① go over / run over / exceed the / one's budget  
② 《a certain amount of money》does not cover expenses  
《for the party, trip, etc.》

日本語の“足”に、①「お金、金銭」という意味がある(この場合、通例、「おかし」という形で用

いる。元は女房言葉らしい。）ことはほとんどの国語辞典に記載されているが、実は、①から発展して②「金銭の不足→赤字」という意味もあるのではないか。現に、（国語辞典ではないが）研究社の「和英大辞典」（第４版）では、そのように分類されている。

それに対して、英語の foot, leg にはそのような“お金絡みの”意味はないことからすると、この「×」は致し方ないところであろう。

仮に、②を「足」の“独立した語義”として認めるならば、「足が出る」＝「赤字が出る」は、もはや“イディオム”と呼ぶに値しなくなるであろう。

× ～から足が遠のく                      keep away from ～

○ 足が棒になる                      ① one's legs feel like logs  
   ② one's legs feel like they've turned to lead

日本語の方は、「歩くために、膝を曲げるのも困難なほど、足の筋肉が凝っている」→「真っ直ぐな棒のようにになっている」という発想であろう。英訳の①もたぶんそれと同じ。一方、②は、「足が鉛のように（＝固く／重く）なった」というイメージか。

× 足を洗う                              ① kick 《the bad habit》  
   ② wash one's hands  
   ③ get off 《the bad company》

③「悪い仲間から抜ける」は分かりやすいが、①と②は興味深い。①は「博打などの悪い癖（＝自分を誘惑するワル仲間）を蹴飛ばして追い払う／倒す」というイメージであろう。直接、foot, leg が現われているわけではないが、その「縁語」である kick（蹴る）が登場している。

②は、前稿でも少し触れた表現。日本語では、悪事をやめたいときに洗うのは“足”であるのに対して、英語では洗うのは“手”である、というコントラストが興味深い。

× 足を伸ばす                              extend one's trip / journey / walk 《as far as / to ～》

「足」を「旅行／散歩」に変えるくらいで、これはあまり“工夫”の余地がないようである。

× 足を運ぶ                                ① visit  
   ② make a call 《at ～》

ここでも、foot, leg の出番はない。

× 足を引っ張る

- ① try to trip 《a person》 up
- ② try to frustrate 《a person》
- ③ thwart / balk / foil 《a person》
- ④ hold 《a person》 back

①に、foot / leg の縁語 trip up (つまづかせる／失敗させる) は見えるものの、foot / leg そのものが出て来ない以上、やはり「×」と判定せざるを得ないであろう。

②「(人を) 挫折させようとする」及び③「(人の) 邪魔をする」は、まあ、普通の表現であろうが、④は興味深い。

人がせっかく progress (前進／進歩) しようとしているのに、根性の曲がった／意地悪な人が、「お前だけ前進するなんて、許せない！」と言わんばかりに、衣服などを掴んで後ろに引っ張って、懸命に前進を阻んでいる光景が目浮かぶような、インパクトのある表現である。

× 足が早い (= 腐りやすい)

- ① go bad quickly
- ② be perishable

△ 足が地についている

- ① keep one's feet on the ground
- ② be steady
- ③ be realistic

日本語にはほぼ重なる①に比べて、②「堅実である」及び③「現実的である」は、(もちろん、“間違い”とまでは言えないが) 表現としての面白味には欠けることは否定できない。

△ at 《a person's》 feet

- ① (人の) 足元に
- ② (人に) 師事して
- ③ (人に) 服従して／(人の) 言いなりになって

文字通りの意味である①においては、「足」が登場しているが、頻度的には②・③の比喩的な意味で使われることの方がずっと多いはず。限りなく「×」に近い「△」、といったところか。

× catch 《a person》 on the  
wrong foot

- ① (人に) 不意に頼み事をする
- ② (人を) 不意に訪ねる

「(人の) 間違った方の足をつかむ」とは面白い表現だが、「間違った方の足」とはどういう意味なのかは不明。

- △ drag one's feet                      ① 足を引きずる  
   ② わざとぐずぐずする

- △ find / get the length of  
    《a person's》foot                      ① (人の) 足元を見る  
   ② (人の) 弱点をつかむ  
   ③ (人の) 性格を知る

- × get / have cold feet                      ① おじけづく  
   ② 氣力を失う

「冷たい足を持つ」とは、面白い表現だが、「(恐怖などで) 足から血の気が引く」→「(足が機能不全を起こして) これ以上先には進めない」という流れか。

- × get one's feet wet                      ① 初めてのことを試みる  
    ※ しばしば命令形で                      ② 参加する

これも由来は定かではない。「足を濡らす」とは、「川を歩いて渡れるかどうか、川べりであれこれ思案している暇があったら、実際に水に入って試してみよ」(→何事も、実際に試してみなくては始まらない) ということか。

- × get / have wet feet                      おじけづく

意味的には、2つ上の get / have cold feet とよく似ている。「足が濡れる」→「冷たさで足が麻痺してくる」→「これ以上、歩き続けることができなくなる」ということか。それにしても、すぐ上の get one's feet wet と形はよく似ているのに、意味はまるで違う、というのも面白い。

- × get / have one's foot in the door                      入るのが困難な所に首尾よく入り込む

“秘密の部屋”のドアがほんのちょっと開いた瞬間に、素早く片足(単数形 foot に注目)を隙間に差し入れて、「これで、侵入に成功したも同然です。もう私の入室は阻めませんよ!」というイメージか。

- × have feet of clay                      ① 脆い、倒れやすい  
   ② 弱点がある

聖書に由来する表現。「土／粘土でできた足を持っている」から容易に想像はつく。

- [illegible]

「自分の口に足を突っ込む」のは、「とんでもない失敗」には違いないだろうから、①の一般的な意味は分かりやすいが、②の特定のな意味（失敗は失敗でも、言葉の失敗）はどこから来たのか。ちゃんとした言葉が出て来るものと信じて、相手の口を見つめて待ち受けていたら、何と出て来たのは彼の足（＝“思慮に欠ける発言”が実体化したもの？）だった、というイメージか。（※4）

- × get a leg in 《a person》 ① (人に) 取り入る  
② (人の) 秘密を握る

「(人の) 中に足を入れる」が、どういう流れで、上のような意味に結び付いたのか？ 「人の“心の扉” がちょっと開いた隙に足を差し入れる」→「心の中に入って、内部を物色する」→「金目の物 (= 秘密) を手に入れる」という流れか。もしそうだとすれば、前出の *get / have one's foot in the door* と相通じるところもある。

- × get up on one's (hind) legs      ① 攻撃的になる  
  ② 怒る

これは、熊あるいはゴリラなどが、興奮した／怒った時に見せる仕草を見た人が作り出した表現であろうと思われる。

- × hang a leg ① ぐずぐずする  
② しりごみする

これは、「片方の足を地面から浮かせてぶらぶらさせる」→「もうこれ以上歩きたくない／（困難が待ち受けている）先に進みたくない」という意思表示、ということであろうか。

- × not have a leg to stand on (議論・主張などの) 根拠を持っていない

これは、非常に分かりやすい。「足を持っていない」→「立ってられない」→「議論／主張はすぐに倒れる／崩れる」というイメージであろう。

- × scrape a leg                      深くお辞儀する

これも、分かりやすい。「片足が（地面を）こするくらい」腰を低くする、というところから来た表現であろう。

△ pull 《a person's》 leg

- ① (人の) 足を引っ張る  
② (人を) からかう

この①は、言うまでもなく、「転ばしてやろうと思って」というニュアンスを持つ文字通りの意味である。比喩的な“足を引っ張る”は、前出。

- × Pull the other leg.

そんな話は信じられないな。

これは、実に興味深い表現である。「もう片方の足を引っ張りたまえ」(すぐ上の pull 《a person's》 leg も参照) がどうして上のような意味に「発展」するのであるのか。「きみが今引っ張った方の足は、ぼくの強い方の足(利き足?)だから、その程度の力で引っ張られても、ぼくは転びやしないよ。お生憎さま。どうせ引っ張るなら、もう一方の弱い方の足だったら良かったんだけどね」→「その程度の嘘ではぼくは騙されないよ」という流れか。

最後に、興味深い一群がある。foot を使っても、leg を使っても同じ意味になる（＝日本語で言う  
と、“足”と“脚”を区別しない）イディオムである。

× stand on / upon one's own  
(two) legs / feet

独立する／自立する

「自分自身の2本の“脚”／2つの“足”で立つ」→「自立する」という、日本人にとっても非常に分かりやすい発想で書かれた表現。

× run off one's legs / feet

- ① 走り疲れる  
② (仕事などで) 疲れ切る

このイディオムには、類例も多いが、「歩き疲れる」、「踊り疲れる」など文字通りの意味ばかりで、上の②のような“多少なりとも比喩的な”意味はほとんどなかった。

× find / feel one's legs / feet

- ① (幼児が) 歩けるようになる  
② 自信をつかむ／一人前になる

①は、「それまで認識できていなかった自分の足（正確には、足を動かす筋肉を司る神経か）を（脳が）見つける」→「這い這い、立ちっ」といった準備段階を経て→「足の筋肉をうまく操って、歩け

るようになる」というイメージか。

②は、そこから派生した意味で、「人生という長い道のり」（＝日本語においても、しばしば見られる比喩）を親兄弟・他人などの助けを借りずとも、自分の足で歩いて行けるようになる、ということであろう。

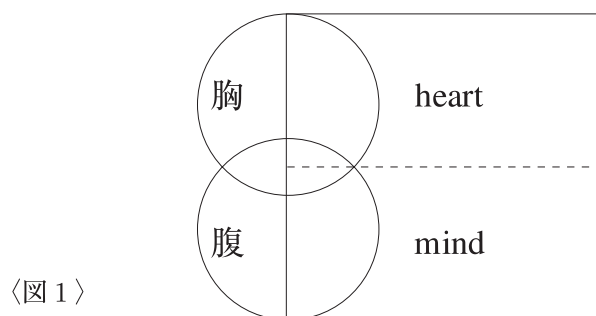
## 5 むすび

以上、4項目を見てきたが、最初の2つ“胸”と“腹”は、共に別の日本語“心”と意味が重なる部分がある（＝その証拠に、共に英訳に heart, mind がよく現われる）以上、やはり一緒に検証すべきであろう。

「共に英訳に heart, mind がよく現われる」と書いたが、その頻度は微妙に異なる。“胸”には heart、“腹”には mind が対応することが多いようである。これと、

- ① “胸”と“腹”は重なる部分がある。
- ② 一方、英語の heart と mind は、「重なる部分はゼロ」とまでは言い切れないにしても、それぞれ「感情の宿るところ」、「知性・理性の宿るところ」という一応の“役割分担”が出来ている。

を考え合わせると、“胸”、“腹”、heart、mind の4者の関係は、大雑把に表わすと、〈図1〉のようになっていると考えられる。（bosom, chest, 及びB群の英単語は、左側の“雪ダルマ”の左半分に対応するのである。）



第3項“腰”では、図示するまでもなく、日本語と英語の対応は見事なまでになかった。日本語では、「カラダのかなめ」というところから出来た“腰”という漢字を見るまでもなく、“腰”は「体全体の中でも、人間の動き・活動を担う／象徴する部位」とでも言うべき意味合いを持たされているのに対して、英語の waist, (lower) back, hip(s) にはそのような概念は含まれていないから、と言えるであろう。

第4項“足”では、“腰”よりは多かったとはいえ、思いの外、対応は少なかった。日本語の“足”の概念が、英語の leg, foot の概念よりも、1段か2段広がっているせいかもしれない。



## ●注

※１ 例えば、「広辞苑」（岩波書店）では４つ、「大辞林」（三省堂）及び「日本語大辞典」（講談社）では６つの定義が与えられている。

※２ 例えば、「腹に据えかねる」という日本語は、筆者の感覚では、「怒りが大き過ぎて／強過ぎて、（怒りの処理器官としての）“腹”に収まり切らない／“腹”では処理し切れない」というイメージである。

また、「腹の虫がおさまらない」も、上記のような“オーバーヒート状態”に追い込まれた“腹”の中で“怒り”処理の責任者である“虫”が「こんな巨大な“怒り”を押し付けやがって… オレにどうしろって言うんだ！」と怒り狂って暴れ回っている光景が目には浮かぶ。

※３ LDCE の

talk turkey *infrm, esp. AmE* to talk seriously and openly, *esp. about business matters*

という説明を読んでも、何ら“推理”の手掛かりは得られなかった。

※４ この表現は、LDCE では、次のように説明されている。

To say something wrong or unsuitable, *esp. as a result of thoughtlessness, and so cause an awkward situation.*

特に、下線部で、「（その失言によって）座の空気を白けさせる」という、“失敗のもたらす結果”にまで触れているのは、さすがLDCE、と言うべきか。

## ●参考文献

- 稲村 松雄 他（編）（1979）「ランダムハウス英和大辞典」小学館  
 金田一春彦・池田弥三郎（編）（1980）「国語大辞典」学習研究社  
 小西 友七（編）（1991）「ジーニアス英和辞典」大修館書店  
 増田 綱（編）（1974）「新和英大辞典」研究社  
 松村 明（編）（1988）「大辞林」三省堂  
 南 満幸（1998）「日英比較表現論（１）」（「稚内北星学園短期大学紀要・第11号」所収： pp. 73-88）  
 -----（1999a）「日英比較表現論（２）」（「稚内北星学園短期大学紀要・第12号」所収： pp. 117-128）  
 -----（1999b）「日英比較表現論（３）」（「稚内北星学園短期大学紀要・第13号」所収： pp. 41-54）  
 新村 出（編）（1955）「広辞苑」岩波書店  
 Summers, Della *et al* (eds.) (1987) *Longman Dictionary of Contemporary English* Longman, U.K.  
 山岸 勝榮・郡司 利男（編）（1991）「ニュー・アンカー和英辞典」学習研究社

## ● 英文タイトル

A Comparative Study of Japanese and English Expressions (4)

## ● 英文要約

This paper is a “sequel” to my previous paper, Minami (1999b). In the preceding paper, I tried to inquire into the similarities and differences in “conception” between Japanese and English expressions, focusing on what we call “body-part expressions.”

Last time, I examined expressions including “head / *atama*,” “neck / *kubi*,” “shoulder / *kata*,” “arm / *ude*,” and “hand / *te*,” but stopped short of comprehending all body parts for reasons of space and time.

This time, I will compare Japanese and English idioms including “other body- parts,” thereby completing “a body that is whole of limb,” with my preceding paper combined.